(3)一変した診療所内の空気

「玉音放送」を境に、病院内の空気、職員の行動は一変した。それまでは院長や加藤が反戦的であることを感じて、それとなく避けていることに気づいていた。ところが彼らは、にわかに接近しはじめた。彼らは食料を心配し、アメリカ軍が町にやってくることに不安を感じていた。だからこそ正確な事情が知りたい。そういう心配や不安をとり除いて、正確な情報を与えてくれるのが院長や加藤だと考えたのだろう。しかし、日本国の行く末について心配する人は、ほとんど誰もいなかった。何も上田の病院に限った話ではない。新しい日本をつくることや、古い体制のもとに苦しんでいる人を救出しようとした人は少なかった。それゆえ獄につながれている政治犯は、日本人自身によっては釈放されなかった。8 月 15 日に獄にあった羽仁五郎は、これで解放されると待っていたが、誰も来なかった、と述べている。

その頃片山敏彦が信州に疎開していたが、「民主主義が勝った。これで世界はよくなるのです」と興奮していた。しかし、築地小劇場で活躍していた俳優・鶴丸睦彦（つるまるむつひこ）は「そんなことはない。帝国主義相互の戦争が一方の勝利で終わったということに過ぎない。アメリカは、日本の支配階級を温存しますよ。見ていてごらんなさい」といった。加藤は片山の考え方に近かった。第二次大戦を民主主義とファシズムの戦いと捉えていたからである。しかし、その後の歴史は、片山の考えよりも鶴丸の考えの正しかったことを証明した。

内閣総理大臣は鈴木貫太郎から東久邇稔彦（ひがしくになるひこ）に変わった。東久邇内閣は「国体護持」と「一億総懺悔（いちおくそうざんげ）」を唱え、国体を維持することに腐心し、治安維持法を廃止するつもりはさらさらなかった。ゆえに三木清は 1945（昭和 20）年 9 月 26 日に獄

死し、戦時中最大の言論弾圧事件「横浜事件」は、同年 9 月から 10 月にかけて、治安維持法によって判決が出されたのである。政治犯を釈放し、治安維持法を廃止したのは、連合国司令部の「押しつけ」であった。よし日本国憲法が連合国軍最高司令部によって「押しつけられた」としても、押しつけられたのは、日本国憲法だけではなかった。